

平成 27 年 2 月 14 日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 阿保 順子 印

副査 平 典子 印

副査 向谷地 生良 印

副査 出口 禎子 印

このたび笹木 弘美にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

学位論文題目

地域で暮らす統合失調症の人々が思い描く生活の広がりに関する研究

学位論文審査結果の要旨

1. 概要

本論文は、統合失調症の慢性期にあつて地域で暮らしている人々が、どのような生活を思い描いて日々の生活を送っているのかに焦点を当て、看護援助の方向性を定めようとした質的研究である。

審査委員は主査 1 名、副査 3 名（内 1 名は他大学教員）の計 4 名で構成され、学位論文審査は口頭発表、質疑応答、博士論文審査基準による評価、審議の順で実施した。

質疑応答では審査委員の質問に的確に応答しており、博士論文審査基準による評価は審査員全員が基準を充たしているという結果であり、本論文は、看護実践や研究への貢献が期待される独創的かつ、完成度の高い論文であると評価された。審査委員の主な意見は次の通りである。

- 1) 統合失調症患者の多くは、語ることに困難を抱えている人が多いためインタビューする側の力量が問われる。それだけに、患者の語りをこれだけ引き出せていることの意味は大きい。内容も示唆に富み、彼らの生活のありようがよく汲み取れるものである。5 例という対象事例数については、量的にもう少しほしいという意見もあった。
- 2) 本論文は、看護師の側が患者の力をみて判断するのではなく、患者が実感をもとに自らの生活を編み出していく力があることを自分で認められるようになることの重要性を示唆している。現場の看護師が、そういった患者の自己認知を促すような看護実践に向きあえるようになるのではないか。
- 3) 患者が頭で思い描くイメージではなく、現実的な生活のありようを支援していくことが大事であるという知見は、看護実践にとっての有用性を示したものである。
- 4) 5 つの軸による構造化については、それまでの結果と照合し、より詳細な説明が必要であるとの意見もあった。

2. 最終試験

最終試験では学位論文に関する口頭発表及び質疑応答を行うとともに、申請者のこれまでの研究業績を精査した。その結果、申請者は研究を遂行する能力が十分あるとの判断に至った。

以上の結果、笹木 弘美は博士（看護学）の学位を授与する資格があるものと判定する。